

優秀賞

あの子と一緒に乗り越える

新潟県糸魚川市立糸魚川東中学校

3年 北村 美來

私はたった一つの小さな命に救われた。それはハムスター。名前は「ポコすけ」。毛の長い女の子だった。自分自身の変化や命の大切さに気付けたのは、あの子のおかげだった。

ポコすけに出会ったのは中学1年の頃、家族でペットショップへ行った時だった。激しいアピールに、私以外の家族が一目ぼれして飼うことになった。私は、家族が決めたこと、世話をする必要はないと思っていた。何より生き物が怖かった。だから、眺めるだけで、愛情も注がなかった。その考えは大きな間違いだった。

その頃、私は不登校だった。友達は優しくしてくれたけれど、教室に入った途端、逃げ出したい感覚に襲われた。休み時間はほぼトイレにこもる状態だった。次第に欠席は増え、とうとう母に

「精神的につらいから休みたい」と泣きながら訴え、不登校になった。

ある日、目に入ったポコすけの様子がおかしかった。足を踏み出すたびに転んでいたのだ。全身は震え、目も開かず、食事もとれていなかった。まさか……と思って母に伝えたら、

「寿命かもしれない」と言われた。その瞬間、不安と恐怖が私を襲った。治療すれば助かるかもしれないと願ったが、動物病院に電話をする母の受話器から、医師の聞きたくない言葉を耳にしてしまった。

「もう寿命かもしれません。最期まで寄り添ってあげてください。」

暖かい布団でポコすけを優しく包んだ。ポコすけは別れの挨拶を告げるかのように母の指を噛んだ。そして、眠るように虹の橋を渡った。私は涙を流し、もっとかわいがればよかった、もっと面倒を見てあげれば長生きしたかもしれないなかつた、自分を責めた。その一方で、飼いたがったのは家族だ、私には関係ないと思った自分を嫌いになった。その後ポコすけを忘れた日はなく、時にはトイレで泣くこともあった。ポコすけがいないケージを見ては、胸が締めつけられた。

ポコすけが亡くなった後から、なぜか私は登校できるようになった。先生が私のために適応教室に誘ってくれたおかげで、少しだけ学校が楽しいと感じた。なかなか同級生の輪に入ることはできず、成績も下がり、落ち込んだ。そのたびに、ポコすけが見えたような気がして、踏ん張ることができた。

家族皆が悲しみから少しずつ立ち直った頃、「またハムスターを飼おう」となった。あの子がいたペットショップに行き、ハムスターコーナーを見た。家族皆で2匹を選んだ。私は、絶対にこの子たちを幸せにする。絶対に命を大切に。もうあの時のような自分を繰り返さない。そう心に決めて、新たな家族を迎えた。ゴールデンハムスターは「きなこ」、長毛種ハムスターは「だいふく」という名前に決まった。このかわいらしい名前をととても気に入っている。この日から初めてのお世話が始まった。餌やり、水換え、トイレ掃除、部屋でのお散歩、たまにおやつもあげ、心を開いてもらうためにスキンシップを心がけた。もちろん、最初は怖かった。母から「ハムスターを持つ時は顔を覆って、優しく包むように。怖がってはダメだよ。」と言われた。

毎日毎日、愛情をたっぷり注いで、スキンシップを続けていたら、自分に変化が起きた。怖さがなくなり、愛おしいと感じるようになったのだ。それから何カ月か経ち、私が手を置くと、きなこが私の手に自ら乗ってくれるようになった。また、私のおなかの上で安心して寝てくれるようになった。だいふくは私の手をなめてくれるようになった。何てかわいいのだろう。優しいぬくもりが私の体中に広がる。「これが愛なんだ。これが大切にしようと思う気持ちなんだ。」と分かった。あの子のおかげで、私は変わった。自分に勇気と愛が芽生えたのは、あの子が私に与えてくれたからだった。

動物の命は儚くて脆い。ハムスターは基本2、3年の寿命だ。きなこもだいふくも高齢を迎える。体が言うことをきかなくなってくるだろう。だからこそ、私たち人間が全力で命を支え、大切にしなければいけない。

現在私は、ハムスターを5匹飼っている。この子たちから勇気ももらい、テストは教室で受験できるようになった。また、相手からの質問や意見に対して、「はい」や「いいえ」を少しずつ表現できるようになった。この子たちが心を支えてくれたから、私もこの子たちの命を支えることができるのだ。私の愛する子たちが最期を迎えるまで、ずっと支え続けよう、愛し続けようと心に決め、お世話をしている。そして、将来は、動物関係の仕事に就きたいと思い、学習に励んでいる。